

2011年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価（以下、自己点検・評価）を実施する制度を構築してきました。2009度より上記の組織以外に聖和幼稚園も学校評価に加わり、世界市民を育成するという同じ目的を持つ関西学院の共同体として、いくつかの共通した評価項目を選択し、さらに一貫教育の繋がりを深めつつあります。

また昨年度から導入された学校関係者評価制度を発展させ、今年度は高等部内の自己評価に対して、大学教職教育研究センター教員、初等部長、中学部長、評価情報分析室副室長との意見交換会を実施し、客観的な評価、指摘をいただきました。これもまた一貫教育の特色そして長所の一つであります。同じ学校法人にありながら、大学、中学校、小学校といった年代の異なる人間の教育に関わっておられる見識ある方々にいただいた評価や指摘は、今後の高等部教育発展の糧になると確信しております。

さて、今年度は、それぞれの組織が共通の評価項目として、「キリスト教主義教育の実践」を、学校評価ガイドライン（文部科学省、2010年7月20日改訂）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「生徒指導」「組織運営」「教育目標」を選び、さらに高等部は独自項目として、「生徒の自治活動」「人権教育」を加えて実施しました。2011年度の実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケートを行い、客観性を高める工夫をいたしました。

今回のアンケート結果では、本学の教育の根幹をなす事柄として、「高等部の教育はキリスト教が土台となっている」についての生徒が回答した肯定的な回答の割合が、一昨年、昨年よりも今年と少しずつではありますが確実に評価を伸ばしていることに勇気を得て、取り組んできた礼拝改革などこれからも地道な努力を続けていきます。また、生徒の自治活動の面でも運動部だけではなく、新しく部に昇格した数理科学研究部をはじめとする文化部、宗教部や子ども会、エコ委員会などの学友会活動など様々な活動においてもさらに充実、発展させていきたいと考えています。関西学院高等部はこれからも自己点検・評価を通じて自らの課題を探り、その課題に誠実に向き合っ、改善を目指していきます。それによって質の高い教育を生徒に提供し、またその結果を社会に公表することによって信頼を高め、課題意識を共有していく所存であります。

2012年3月23日

関西学院高等部
部長 石森圭一

学校評価シート

【キリスト教主義教育の実践】

現状の説明

「キリスト教主義教育の理念の共有」と「推進」に関しては、教職員・保護者・生徒ともに概ね大切なものと理解していると思っている。高等部教育の根幹の部分が理解され、自覚されていることはキリスト教主義教育を基礎におく本校にとっては重要なことである。

評価・分析（アンケート結果を含む）

教員・保護者と生徒の間にはやや意識の差がある。アンケートの結果を見れば、思いのほか生徒の評価が低い。生徒が回答した肯定的な回答の割合は、57%（高等部の教育はキリスト教が土台になっている）、63%（礼拝の時間は大切である）、68%（聖書の言葉に共感できる）である。しかし、これらの数字は、一昨年よりも昨年、昨年よりも今年と少しずつではあるが、確実にパーセンテージを伸ばしている。高等部の宗教教育が浸透しつつある証拠だと思う。

ただ「学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心」については昨年 27%だった肯定的な回答が 19%とかなりパーセンテージが下がっている。この理由には、クラブに没頭できるようなクラブ活動が多くなり、そういったクラブに属している生徒が多くなってきていることがある。クラブの実績が生徒募集の原動力になっている高等部であるから、当然の数字でもある。生徒の自覚や関心が薄れているというよりは、「時間がとれない」というのが現実であるように思う。宗教部の生徒など、これらのことに特化している生徒もいることも覚えてほしい。

改善の具体的方策

「キリスト教主義教育の理念の共有」と「推進」について、思いのほか生徒の評価が低いことに関しては、教会出席のあり方、出席方法など、更に検討を行い、これらの自覚や関心をもっともてるように聖書科教員のみならず、全教員が協力しあうことで取り組んでいく必要があると考える。

また、「学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心」については、チャペルにおいて、牧師・クリスチャンワーカーにメッセージを担当してもらう機会を更に増やし、意識づけをしていくことはもちろんだが、宗教部、ボランティア委員会、エコ委員会などの組織を整理し、これらに属している生徒の活動を特化していきたい。特に東日本大震災の復興の具体的な手助けを考えていきたい。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

「各運動部の活躍が目立っているが、この先の学校の在り方についてはどうか？」という問いがあり、その問いを受けて、「スポーツだけを突出させているのではない。男子校でもあるので、結果としてスポーツが目立っているだけ」という応答がなされた。高等部では、文化部もすばらしい活動をしているし、高等部全体の宗教プログラム、宗教部の活動も対外的にアピールできるものである。しかし、特に宗教的なものについての積極的なアピールはあまりされてこなかった。その背景には「あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」（マタイ 6:6）という聖書の言葉にあるように思う。しかし、この場合のアピールは、自分を「偉く」見せるためではなく、輪を広げるためのものであると思う。クリスチャン生徒、クリスチャンホームの生徒がほとんどいない現状を前に、積極的なアピールが必要であることを痛感している。

学校評価シート

【教育課程・学習指導】

現状の説明

本校では推薦制度にもとづいて、9割以上の生徒が関西学院大学へ進学する。よって教育課程における目標は、大学で学ぶ力を保障し、多様な社会の要求に応えうる総合的知識を育成することにある。そこで3年間の学びにおいて 1、基礎学力の充実 2、深く学ぶ 3、知の統合 を目指す。

学習指導では1年次には全クラス同じカリキュラム(数学のみ習熟度別授業を展開)だが、2年次からはコース制を導入する(2年次には英語が習熟度別授業を実施)。そして3年次には選択授業や高大連携プログラムを行うなど、高度な内容の講義に触れる場を設定している。

評価・分析 (アンケート結果を含む)

教育課程の説明(進級・卒業・推薦)の適切性に関しては、教員・保護者・生徒とも77%超が「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に評価している。

また「自分達の学力・体力は的確に評価されている」「興味深い授業がある」という項目でも、保護者の80%以上・生徒の70%以上が肯定的に評価している。

一方「授業を通じて学力がついている」「わかりやすく工夫している授業がある」「補習や選択授業など生徒の個性・能力に応じた学びが行われている」という項目では、保護者・生徒とも肯定的意見は60%超に留まる。中でも「学力がついている」という項目は、1年次70%が2年次59%・3年次60%と上級生になると肯定的評価は大きく低下する。また「補習が適切に行われている」項目も、1年次69%が、2年次53%・3年次55%と、1年生と上級生の肯定的評価差は大きい。

この項目で1年生の指標が唯一高いのは、入学間もない緊張感だけでなく、今年度の1年生には居残り指名補習を強化した。その成果が現れたものと考え。

「選択授業に対する満足度」は全体で62%が肯定的に捉えている。1年次は全クラス同じ授業を行っているにもかかわらず、数学習熟度別を体験したためか、63%が肯定的に評価している。ところがコース制を導入する2年次では、48%に減じている。これは英語の習熟度以外に週2時間しか選択授業がなく、かつ必ずしも自分の希望した科目を履修できない場合もあるためと考える。これは選択授業の幅が広がる3年次評価が、76%の生徒が高く評価していることからわかる。

また「外部テストはその後の学習に役立っている」という項目は全体の肯定的評価は61%だが、この項目でも1年次72%・2年次59%・3年次53%と下降線を描く。「受験」というゴール設定がない中で、「偏差値(自分の立ち位置)を知って、目標到達に向けて次なる努力する」という思考パターンに結びつけていない。受験勉強とは異なる「なぜ勉強をしなくてはいけないのか」という本質的問題といえる。またこの項目は教員も62%と肯定的意見は低い。やはり外部テストの活用方法については、業者を交えるなど工夫が必要と思われる。

改善の具体的方策

「進級・卒業・推薦に関する説明会」は、概ね保護者・生徒から理解されていると判断して良いが、さらに細やかな情報伝達を行うよう心がけたい。

「授業を通じて学力がついている」「わかりやすく工夫している授業がある」「補習や選択授業など生徒の個性・能力に応じた学びが行われている」という項目では、引き続き肯定的評価が高いとはいえない。しかし改善策として一昨年末、「受けてみたい授業」に関するアンケートを生徒に実施した。そこから「興味深い内容」や「授業に工夫がされている」ものを求める結果が浮かび上がった。内容の陳腐化につながらないよう配慮は必要だが、教員に

結果を公表し対策を促した。また教員の授業内容向上に向けて、教員同士の授業見学や、教科の取り組みに関する研修会を実施した。その成果として一年後同種の項目では 7%近く改善されている。今後においても「授業評価」を実施している教員の好事例を参考にし、授業の質を高める努力を促したい。

また「補習などは適切に行っている」に関して、分析欄にも記入したように1学年に特化して「指名補習」を念入りに行った結果、当該学年の評価は他学年に比べて15%ほど高い。しかしクラブ活動などの活動量・質の高い2・3年生にも適応すべきかは、総合的判断が必要となる。また試験前の「質問会・補習」時間を設定しても、有効活用する生徒が少ないという現状もあり、こちらの項目も「どのような形態の補習」を生徒が求めているのかアンケートをとり、改善につなげたい。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

教育課程・学習指導の分野では、昨年度に引き続き「授業を通じて学力がついている」・「補習や選択授業など生徒の個性・能力に応じた学びが行われている」の項目が高い肯定的評価を得たとはいえない。

推薦制度を土台とした本校では、大学へ入学するためのテクニックではなく、大学へ進学することを前提とし、本当の学力とは何か、本当の知性とは何かということが問われる。

そこから進路と結びつく内容の授業展開を行うことが理想である。しかし人数の制限もあり必ずしも希望がかなえられるものではない。よってこの項目評価が飛躍的向上につながる解決策ではないが、偏差値や受験勉強とは異なる「なぜ勉強をしなくてはいけないのか」という本質的問題と常に向き合う必要があるといえる。

また「補習」に関しては、教師と生徒の要望にズレがないか、アンケートをとりながらさらに細やかな対応を取りたい。

学校評価シート

【生徒指導】

現状の説明

昨今の社会環境の急激な進化に伴う生活環境の変化は、学校（教師）と生徒、生徒と保護者、保護者と学校（教師）の関係にも今までに経験したことのない事象が起りつつある。学校内の問題行動も、ソーシャルネットワークから発生するトラブルやパソコンへの不正アクセス等の問題が発生している。

また、道路交通法の改正により特に自転車への取り締まり強化が実施されている。高等部では自転車通学を許可制で実施しているが、登下校時の事故の発生件数も増加している。

上記の問題は、情報教育や保健の授業や外部からの講師を招いての研修会等で情宣を図っているが、生徒が十分に理解をして行動できていないのが現状である。

評価・分析（アンケート結果を含む）

アンケートの結果を見ると、全体的には教師の約80%が肯定的、保護者の約70%が肯定的な評価をしているのに対し、生徒アンケートでは肯定的な回答が50%から60%に留まっている。このことは、教師の指導・実践の努力が保護者には理解を得ているが、生徒には伝わりにくかったということを表しており、生徒へのアプローチの仕方において教師の工夫が望まれる。

特に、学校のルールやマナーの明示や指導の項目において肯定的意見が教員で60%台、生徒では40%前半であるという結果は、日常の生徒指導の最重要項目であるべき事項を教員が自信を持って指導監督ができていないことがこのような生徒のアンケート結果を招いたのではないかと思われる。

改善の具体的方策

本来、生徒指導は生徒の個性を伸ばしつつ、同時に社会的資質や能力・態度を育成していくことを目的としている。このアンケートの結果を踏まえ、生徒が守るべきルールを教員相互が共通理解を持ち注意深く指導していかなければならない。

具体的には、スマートフォン・ゲーム機・音楽プレーヤー等のインターネット接続機器に対する使い方のルール作りやマナー指導、ソーシャルネットワーク上で発生する肖像権の侵害や、名誉棄損行為等に対するルール作りをしていく必要がある。

また、登下校時の歩行者・自転車乗車マナーの周知徹底を講習会を開催するなどして図り、生徒の安全と他者を傷つけないように指導をしていく必要がある。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

インターネットに関するソフト（アプリ）は日々進化しており、我々教師も生徒動向の現状把握に努めながら、変化に対応できるルールづくりが急務である。

中学部との連携に関しては、男女共学に向けて今まで以上に中高の連絡を密にして、情報の交換を図り、発達段階に応じた指導をしていく必要がある。

上記の事項を踏まえ、学校生活のルールを今後の制度・状況に即したものに改善し、なおかつ、ルールに沿ったマナー教育の骨子を作成し、教師が日常的に積極的な姿勢でマナー指導を心掛けていくことが不可欠である。同時に、保護者に対しても学校のルール、マナー指導の実態を情宣していかなければならないと思う。

学校評価シート

【教育目標】

現状の説明

教育目標は、まず第一にキリスト教主義教育・建学の精神・人格教育があるが、これらは礼拝、聖書の授業、その他の学校行事の中で、その実現が目指されており、またすべての授業や教育場面において、留意されている。礼拝は、全校礼拝（毎週金曜日）、学年礼拝（週1回）、早天祈祷会（毎週火曜日）などが行われ、聖書の授業は週1時間、三年間行われ、春、秋の宗教運動週間、ゴスペルコンサートなどの宗教的行事を行なっている。春に行われる「子ども会」も建学の精神に繋がる行事である。また、色々な行事はすべて生徒のお祈りで始められている。

次に大学への推薦制度を生かしたバランスの取れた教育の展開が、教育目標の一つとして挙げられる。高等部ではクラブ活動が非常にさかんで多くの生徒が充実感をもって、各々の目標達成に向けて励んでおり、勉学との両立を図ることによって大きな成果を上げている。多くの運動部が全国大会、近畿大会に出場し、活躍している。また文化部でも、グリークラブ、吹奏楽部が各種のコンクールで高い評価を受けているほか、新設された数理科学部はその活動が国内外で注目され、文部科学省からも特別に援助を頂くなど、活躍が顕著である。また、クラブ活動ではなくてもいろいろな学外での活動を通じて、生徒達が活動している。

学校の将来構想、学校改革の方向性の明確化については、教師会では討議し、ある程度の共通認識を図れているが、保護者に対しては、育友会の諸行事の中で説明する位で、そのため機会を設けたり、積極的に説明することをあまり行っていない。

評価・分析（アンケート結果を含む）

キリスト教主義教育・建学の精神・人格教育の面については、教員で86%、生徒で54%、保護者で81%が肯定的な答えをしている。生徒の肯定的な回答の割合は、権威的なものに批判的になりやすい年齢的な事情を考えれば、これでも高い方ではないかと考えられ、教育目標として浸透していると判断する。

推薦制度を生かしたバランスの取れた教育の展開については、教員で95%、生徒で63%、保護者で78%が肯定的な答えをしており、この教育目標が達成されていることを示している。これは、やはり近年の各クラブの活躍に表れているような、部活動の充実が大きな要因であろう。

学校の将来構想、学校改革の方向性の明確化については、教員で70%、保護者で58%が肯定的な答えをしている。教員については、ほぼ全員が学校の将来構想、方向性について理解をできていることが望まれる。保護者についても、さらに多くの方に理解して頂くことが望まれる。

改善の具体的方策

教育目標の中で、キリスト教主義教育・建学の精神・人格教育の面については、現在の教育活動を自信を持って推進していくという方向で、更なる充実を目指していく。推薦制度を生かしたバランスの取れた教育の展開についても、現在の状態を維持、発展させ、生徒達の充実した発達を目指していけばよい。

学校の将来構想、学校改革の方向性の明確化については、教師会でそのことを常に確認しながら進むことが必要である。また保護者に対しては、いろいろな機会を通じて、将来への学校のビジョンを発信していく努力を怠ってはならない。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

現在の学校の状態について、各運動部の活躍が目立っているが、この先の学校にあり方はどう考えているのか、という質問があったが、本校はスポーツだけを突出させるのではなく、文化部の活動も含めて、バランスよく生徒の活動を活発にしていきたいと考えている。男子校なので結果的にはスポーツの分野が目立つが、音楽関係の部をはじめ、数理科学研究部、理科部などの活動もバックアップし、発展の方向に向かっている。男女共学に向けて、特に文化的活動の振興が重要であると認識している。

教育目標の保護者への浸透については、難しさは理解できるとの評価者からの指摘を頂いた。しかし、今後は保護者の協力と理解が学校にとって重要なことになることは確かなので、それに向けて努力が必要である。

学校評価シート

【組織運営】

現状の説明

現在の校務分掌は、1995年に確立され、教職員ハンドブック第一篇「組織・運営」の分掌組織図、校務分掌細目、高等部事務室事務分掌に、詳細が決められている。校務分掌は、部長・副部長と、教員の代表からなる人事委員が人事委員会を開催し、検討の上、決定している。分掌全体は、部とその下にある委員会から構成されている。部には主任・副主任、委員会ではコンビーナが長となって統括している。他に、検討委員会、学院の各種委員会などがある。事務室と教員の関係は、事務室と副部長で調整し、円滑な分担の下に業務を遂行できるようにしている。分掌上の問題は、専任教員数に比べ、委員会の数が多く、一人がいくつもの分掌を兼ねている点で、そのことが教員の負担感を大きくし、またスピーディーな対応や他の分掌との連携を難しくしている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

教員のアンケート結果では、校務分掌の現状に対する三つの質問に対して、概ね肯定的な答えが多い。しかし、中では分掌間の連携について肯定的な答えが57%と、比較的低い。教員の事務室の業務に対する評価、教員と事務室の連携については全体的に高い評価を得られた。生徒のアンケート結果では、教師のチームワークが良好であるという肯定的な答えが45%と半数にいたっていない。事務室の対応については、75%もの生徒が高く評価している。保護者へのアンケートでは、教師の役割分担、チームワーク、事務室の対応について、すべて70%～90%と高い評価を行っている。

分析としては、教師の側からは、分掌間の調整・連携・協調を図ることが必要である。次に生徒の目から見て、教員間の連携不足という部分があると考えられる点が上げられる。さらに、事務室の業務は、大変、うまく行われていると判断できる。

改善の具体的方策

分掌間の連携については、まず情報の共有と協議の場を提供することが必要で、そのためには何が必要か検討する。会議をこれ以上に増やすことは難しいので、一つのアイデアとして、メール掲示板などを利用して、情報の共有を図り、意見を述べ合うというような方法もありうる。教師のチームワークへの見方についても、分掌間の情報共有と連携が進めば向上すると考えられる。

現在の校務分掌は、組織全体として、有効であると思うので、課題としては、分掌間の連携の促進に尽きると思われる。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

評価者からは、まず中学部との連携の強化が課題であるという指摘があった。高等部教員もそのことは大きな課題であると認識しているため、より一層の連携が必要であるという意識から、低い評価になっていると思われる。特に、発達障害の問題、生徒のケア、危機管理の面で、連携が必要との指摘があった。現状で、中三の担当教員と高一の教員が引継ぎの情報交換会を毎年行っており、大きな問題については、情報共有ができていると思われる。

中高間だけでなく、分掌間の連携、情報共有の必要性も指摘された。教科内や分掌間の情報交換や協力関係の強化については、努力しているが、組織が多様化し、放課後の会議が増えると、その分生徒対応の時間が減るといった問題もあり、障害も多い。今後、効率的で有効な連携を深める方法を検討したい。

学校評価シート

【人権教育】

現状の説明

高等部における人権講座は、1年間を通じて各学期を次のように分けて実施している。礼拝の時間帯の10:20-10:45の25分の時間帯を利用。一学期は1年生、二学期は3年生、三学期は2年生をそれぞれ学年を二分割して一週間に一回の講座を実施。

1学年では「身近な人権問題」について扱う。具体的には、「いじめ」、「障害者差別」「スクールセクハラ」などをテーマに「人権」「差別」「人間の尊厳」などについて考える。2学年では、人々が差別と向き合ってきた歴史を学び、差別を生み出す社会の構造について考えていく。例えば、部落差別や水平社宣言の今日的意義について、また在日韓国朝鮮人やハンセン病患者などの差別の実態を取り上げる。3学年では、最終学年として人権に対する理解や意義を深め、「差別を許さない」態度の形成を目指す。「平和と人権」のテーマの下で、戦争がなくても「平和」ならざる社会状況をもたらす要因は何かについて考える。2007年より毎年11月中旬に「いじめ実態調査」を実施している。

評価・分析（アンケート結果を含む）

毎年1回でも「いじめ実態調査」を実施して、学校として「いじめ」問題に重大な関心をもってその防止に取り組んでいることを保護者に受け止めてもらっていると思われる。それが保護者への質問の集計結果82.6%の肯定的な回答に現れている。一方、生徒たちには、学校の明確な形での取り組み、姿勢が示されないことから、不信感を表す結果になっているのではないかと。生徒への質問17の集計結果は58%の肯定的回答、生徒への質問29の集計結果が60%の肯定的回答にとどまっていることから、学校のいじめに対する取り組みの姿勢を生徒たちに認識できる形に持っていく必要があると思われる。

改善の具体的方策

生徒への質問30の結果が58%、保護者への質問21の結果が51%の肯定的回答から、家庭に人権教育の一翼を担うことを頼るのは難しく、生徒たちに人権尊重の精神と実践力を育てていくためには、何よりもまず、学校・各教職員による積極的な取り組み（授業やHRでの）が重要となる。家庭でも人権問題を親子で話し合うことはほとんどないと思われる。だが、人権講座だけに頼るのには限界がある。

学校関係者評価（評価者との意見交換を受けて）

人権教育に関して中学部と高等部は、大学の神学部・宗教主事を中心とした「関西学院と人権教育」研究会に参加して相互の人権教育の取り組みについて情報・意見交換をしている。年間数回の研究会も持たれて、その意味では中高の連携を保っていると言えるが、対外的活動に関して中学部の方は余り見られないので、対外的には中高の連携は無いような印象もあるのではないかと考える。

問題は、内部における生徒部と人権教育委員会の人権に関わる事象をめぐる連携ではないかと思われる。人権講座は人権問題への啓発・防止を担当し、生徒部は人権に関わる問題行動が生徒間で惹起された場合の対応・処理というように役割分担の構図が存在しており、この点に連携を深めて人権問題の解決を図っていく必要があると考える。

今年度は関西学院高等部が阪神地区人権教育の当番校に当たっており、本校で3回の地区主催研修会が行われたが、それを本校教職員向け人権研修会とし、多数の参加者があった。また、10月に鹿児島で行われた人権教育全国研究大会にも若手を含め3名の教員が参加しており、教員が人権教育について触れる機会を有効活用できるよう努めている。そのほかに

も、生徒対象の人権講演会などの企画も生徒の意識高揚につなげるのに多くの工夫が必要となる。まず、家庭での日常的な啓発活動を促すために保護者対象の人権企画からはじめて、教師の教育現場での人権指導を推進することが重要と思われる。

学校評価シート

【生徒の自治活動】

現状の説明

少子化が進む現代にあつて、小中学校に於ける学級崩壊やコミュニケーション能力の低下が叫ばれているが、関西学院高等部では伝統的に自由と自治を標榜してきた。それらは全校生の単位ではアッセンブリー(生徒集会)や生徒総会において、また最小単位であるクラスにおいては週一回のホームルームにおいて主に実践されてきた。それらの活動にはかなりの自由な裁量を与えられてきたが、同時にその自由を自覚と責任を持って民主的に活用することが求められている。

一方課外活動の面では、近年海外でもその業績が評価されてきた数理科学研究サークルが正式な部に昇格し、今年度もシンガポールで開催された数学学会(CMCGS)で発表するなど活躍を見せた。また、各運動部も活発な活動を続けており、平成23年度兵庫県高等学校総合体育大会では53.00点を上げて第2位となる活躍を見せた。

評価・分析 (アンケート結果を含む)

ホームルームについて教師側は「生徒が民主的に話し合えるように指導しているか」という設問に対して「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて73%いるが、生徒の側で現実にならなっていると答えている者は62.7%。学校行事に関しても同じ程度の生徒教師間の乖離が見られる。保護者の見方も教師に近いが、生徒の感覚とはややずれがあると言わざるを得ない。アッセンブリーや生徒総会に至っては、その乖離は一層大きくなる。自治の伝統に対して生徒の意識や現状が追いついていないと言える。

改善の具体的方策

まず自治活動の最小基本単位であるクラスの活動つまりホームルームから見直してみる必要がある。1年時には高校生活における自治活動の意義から始めて、ホームルームでの民主的な話し合いなどこれまで以上に具体的に説明し、学年が上がるにつれてそれを自分たちの力で実践できるように導く流れを作る。そのようにして培った力は学年が上がってより大きな責任のある立場に立った時に力を発揮する。このように生徒たちを育てることができれば、我が校の伝統的な自由と自治を重んじる方針を変更するのではなく、むしろ充実させることになると見込まれる。

学校関係者評価 (評価者との意見交換を受けて)

評価者との意見交換会では、今後の学校の方向性に関して、運動部強化以外の点について問われたが、拡大化・共学化を踏まえると生徒の自治活動の活性化が期待されるだろう。しかしその指導を担当教員や個々の教員に任せただけでは一時的なものに終わってしまう。高校生はもう子供ではないから自分で判断し行動するが、自分が属する生徒集団を民主的に運営していくための技術や発想をどう身につけさせるか、また民主主義の根本にある互いの存在を認め合う精神をどのように理解させていくかは学校全体で取り組まなければならない課題と言える。そしてそれはそのまま文科省が新指導要領の第4章特別活動の目標に掲げている「集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ことにつながっている。

2011年度 学校評価 実施項目一覧 (高等部)

大項目	小項目	目標	アンケート				
			教職員用	保護者用	生徒用		
共通	キリスト教主義教育の理念の共有	教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している	1. 教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している。	1. 学校が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している。	1. 高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う。		
		キリスト教主義的人間理解を基に日々の教育活動を行っている	2. 学校は、キリスト教的人間理解を基に日々の教育活動を行っている。				
		教員がキリスト教主義教育への理解を深める環境にある	3. 学校は、教員がキリスト教主義教育への理解を深める環境を提供している。				
	キリスト教主義教育の推進	礼拝を学校の重要な柱として守っている	4. 学校は、礼拝を教育の重要な柱とし、教員はそれを意識して守っている。		2. 礼拝の時間は大切だと思う。		
		生徒のキリスト教的人間理解を育成するためのプログラムを実施している	5. 学校は、生徒のキリスト教的人間理解を育成するプログラムを実施している。				
		生徒に教会出席を奨励している	6. 学校は、生徒に教会出席を奨励している。				
	キリスト教関係諸団体との連携	教会など他のキリスト教関係団体から礼拝の奨励者を招いている	7. 学校は、教会など他のキリスト教関係団体から礼拝の奨励者を招いている。		3. 聖書の言葉には共感できる部分がある		
		教会などキリスト教関係団体を通じて献金を広く献げている	8. 学校は、教会などキリスト教関係団体を通じて献金を広く献げている。				
		キリスト教諸団体と種々の連携を図っている	9. 学校は、キリスト教諸団体と種々の連携を図っている。				
							4. 学校外部のキリスト教関連団体(教会・ボランティア)に関心を持っている。

2011年度 学校評価 実施項目一覧 (高等部)

大項目	小項目	目標	アンケート			
			教職員用	保護者用	生徒用	
ガイドライン 教育課程・学習指導	教育課程についての教職員間の共通理解と連携	教員が教職課程の全体像を理解している。	10. 学校は、進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に行っている。	2. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。	5. 学校から進級・推薦・卒業などに関する説明を適切に受けている。	
		教務部を中心として教員は教育課程について連携を図っている	11. 教育課程の編成や実施について教務部を中心として連携を図っている。			
	生徒の学力・体力の的確な把握	外部テストの導入などにより、より客観的な学力把握に努めている	12. 教員は、外部テストなどを活用して生徒の学力を把握し、その後の指導に役立っている。	3. 学校は、生徒の学力・体力を的確に評価している。	6. 実力テスト・GTECなどの外部テストは、自分の学力分析やその後の学習に役立っている。	
		教員は学力評価についての理解向上に努めている	13. 教員は、生徒の学力・体力の的確な評価に努めている。			7. 自分たちの学力・体力は的確に評価されている。
		教員は体力評価についての理解向上に努めている				
	各教科の特性に応じた授業の工夫	教員は自らが担当する教科の特性を理解している	14. 教員は、授業を通じ、生徒に適正な学力を定着させている。	4. 学校は、授業を通じ、生徒にしっかりした学力の定着を図っている。	8. 授業を通じ、学力がついている。	
		より質の高い授業を目指して、教員は不断の研究を行っている				
		教員は授業研究の成果を活かし、授業への不断の創意工夫をしている	15. 教員は、質の高い授業を目指し、授業研究を十分に行っている。			9. わかりやすく工夫している授業がある。
	個々のニーズや興味関心に応じた授業展開	知的好奇心の喚起に留意した授業が行われている	16. 教員は、授業研究の成果を活かし、授業改善の工夫を行っている。	5. 学校は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。	10. 興味深い内容のある授業がある。	
		学齢に応じて選択授業が展開されている	17. 学校は、補習・選択授業を通じ、生徒の個性・能力に応じた学びを展開している。		11. 選択授業は充実している。	
		補習など特別な学習機会が提供されている			12. 補習などは適切に行われている。	
	接続学部との連携	初等部と中学部との連携がされている	18. 学校は、大学・学部に関する情報を生徒に適切に提供している。	6. 学校は、大学に関する情報を適切に提供している。	13. 大学に関する情報を知り、進路について考える機会がある。	
中学部と高等部の連携がされている		19. 高等部は、中学部と適切に連携を図っている。				
高等部と大学の連携がされている		20. 高等部は、大学・学部と適切に連携を図っている。				

2011年度 学校評価 実施項目一覧 (高等部)

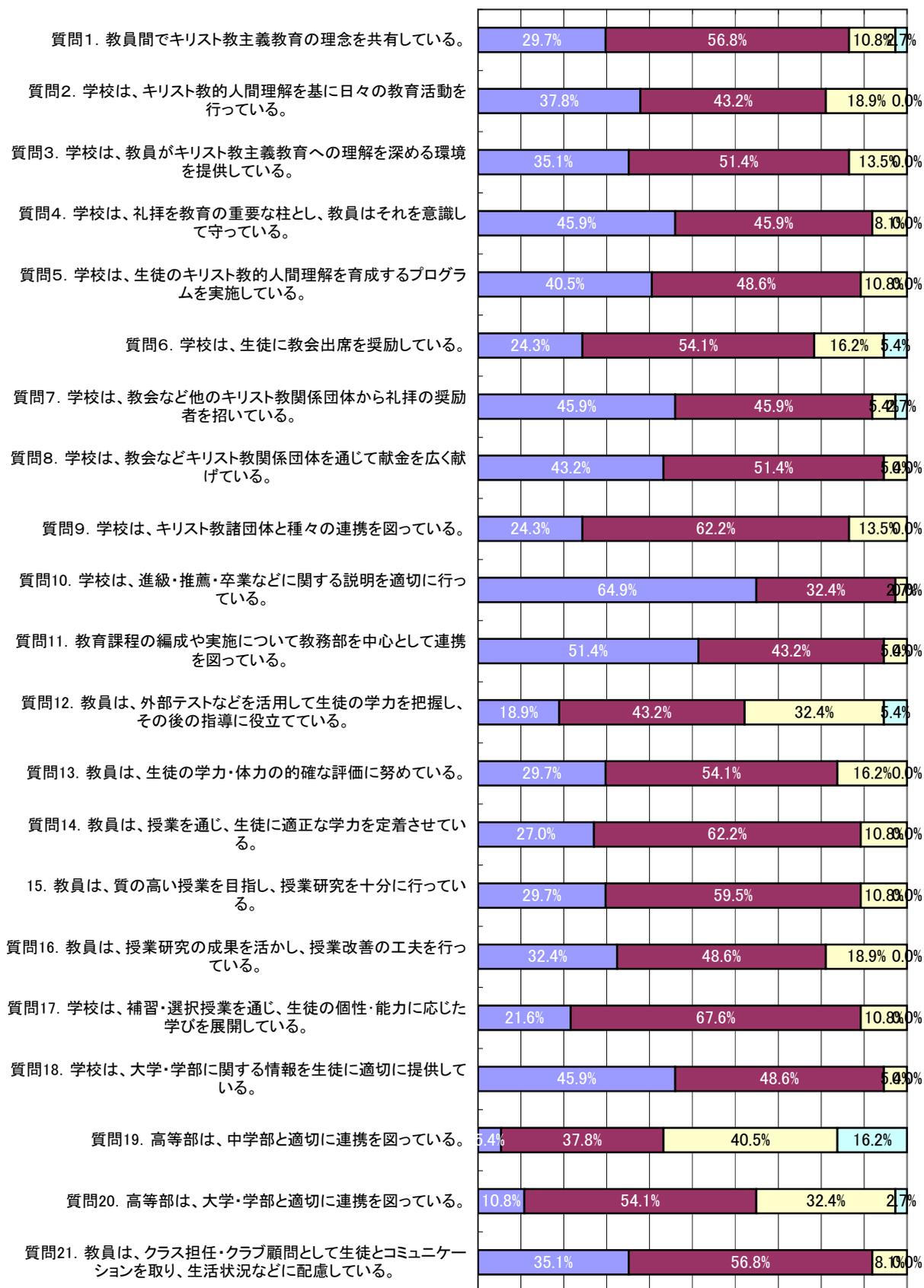
大項目	小項目	目標	アンケート			
			教職員用	保護者用	生徒用	
ガイドライン 生徒指導	学校生活の尊重	HR担任、クラブ顧問は、担当生徒の生活状況に細かく目を配る	21. 教員は、クラス担任・クラブ顧問として生徒とコミュニケーションを取り、生活状況などに配慮している。	7. 学校において、教師と生徒とのコミュニケーションが十分とれている。	14. 担任やクラブ顧問とのコミュニケーションが十分取れている。	
		挨拶・時間厳守・美化等、学校生活の基本となる事柄を大切にしている。	22. 学校は、挨拶・時間厳守・美化など、学校生活の基本ルールを適切に指導している。	8. 学校は、挨拶・時間厳守・美化など学校生活の基本ルールを適切に指導している。	15. 挨拶・時間厳守・美化など学校生活の基本が適切に指導されている。	
		礼拝・授業を大切にし、それに取組む正しい姿勢の育成に努める				
	規範意識の涵養	守るべきルールとマナーを明示し、日々の指導をきめ細かくおこなう	23. 学校は、守るべきルールやマナーを明示し、日々の指導をきめ細かく行なっている。	9. 学校は、生徒が規則正しい生活が送れるよう適切に指導している。	16. 守るべき学校生活のルールやマナーがはっきりしている。	
		状況を弁え、周囲に配慮して行動できる、よき社会人の育成を図る	24. 学校は、状況をわきまえ周囲に配慮して行動できる、よき社会人の育成を図っている。		17. 学校は、不正やいじめを許さないよう指導している。	
		不正を憎み、弱い者を守ろうとする、公正と思いやりの心を育てる	25. 学校は、不正やいじめを許さない強い姿勢を生徒に示している。			
	問題行動への対応	問題を早期に発見できるように教師間で情報を収集し、その共有を図る	26. 学校は、生徒の問題行動などの早期発見に努め、教員間で情報の共有を図っている。	10. 学校は、生徒のトラブルや問題行動などに対して、迅速かつ的確な対応をしている。	18. 学校は、問題やトラブルが起こった際、適切な対応をしている。	
		問題行動に対して、迅速かつ平等性のある適切な指導・訓戒を行う	27. 学校は、生徒の問題行動などに対し、迅速かつ適切な指導を行っている。			
		教師・保護者間で情報交換と共通理解ができるよう普段から努める	28. 学校は、保護者との間で生徒に関する情報交換を適切に行っている。			
	ガイドライン 組織運営	教職員の組織の適正なあり方	校務分掌が正常に機能している	29. 校務分掌は適切に機能している。	11. 教師の役割分担は正常に機能している。	19. 教師によって色々な役割分担を担っていることを理解している。
			各分掌の意思決定が適切に行われている	30. 各分掌の意思決定は適切に行われている。		
			各分掌の連携と協力が適切に行われている	31. 各分掌間の連携が正常に機能している。	12. 教師のチームワークは良好である。	20. 教師のチームワークは良好である。
事務室と教員との連携		事務室の業務の円滑な推進を目指す	32. 事務室の業務は適切に行われている。	13. 事務室は適切に保護者に対応している。	21. 事務室は適切に生徒に対応している。	
		事務室と教員の連携を適切に行う	33. 事務室と教員は適切に連携している。			

2011年度 学校評価 実施項目一覧（高等部）

大項目	小項目	目標	アンケート		
			教職員用	保護者用	生徒用
ガイドライン	教育理念・目標等	教育理念・目標	34. 教育全体において、キリスト教主義教育・建学の精神・人格教育の重視が目標されている。	14. 教育全体において、キリスト教主義教育・建学の精神・人格教育の重視が目標されている。	22. 教育全体において、キリスト教主義教育・人格教育の重視が目標されている。
		一貫教育(推薦入学)を活かしたバランスの取れた教育	35. 大学への推薦制度の利点を活かしたバランスの取れた教育が展開されている。	15. 大学への推薦制度の利点を活かしたバランスの取れた教育が展開されている。	23. 建学の精神「マスタリー・フォア・サービス」が自分自身の生活や考え方に浸透したと思う。
		将来構想、学校改革の方向性の明確化	学校の将来構想、学校改革の方向性を検討する	36. 学校の将来構想、学校改革の方向性が明確になっている。	16. 学校の将来構想、学校改革の方向性が明確になっている。
独自	生徒の自治活動	ホームルーム活動の充実	37. 学校は生徒がホームルームで民主的に話し合えるようにサポートしている。	17. ホームルーム活動が生徒の手で民主的に行われている。	25. ホームルーム活動が生徒の手で民主的に行われている。
		生徒会活動の充実	38. 学校は生徒が学校全体の一因として学友会総会や行事に取り組めるように促している。	18. アッセンブリーや総会に積極的に参加している。	26. アッセンブリーや総会に積極的に参加している。
		学校行事の充実	39. 学校は生徒がなるべく自分たちの手で行事を運営するように導いている。	19. 学校行事に一生懸命取り組んでいる。	27. 学校行事に一生懸命取り組んでいる。
独自	人権教育	人権を侵害する様々な現実から深く学び、人権尊重の精神と実践力を育てる	40. 教科等の指導において、一人一人が大切にされる授業がなされ、お互いの良さや可能性を発揮できる学習活動づくりがされている。	20. いじめのアンケートやホームルームでの取り組み等を通して、高等部は学校としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる。	28. 高等部では、学校の教育活動全体で一人一人の生徒の人権が尊重される環境になっている。
			41. いじめなどがなく、一人一人の生徒が安心して過ごせる環境づくりができ、お互いの生き方や可能性を認め合う仲間づくりを促すなどの生徒指導、学級経営などがされている。	21. 生徒自身が種々の人権問題についてより関心を持つようになったと家庭で感じる。	29. いじめのアンケートやホームルームでの取り組み等を通して、高等部は学校としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる。
			42. 現在続けている人権講座を今の形を保ったまま継続していくべきである。		30. 人権教育の時間を通して、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている。

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(高等部・教員 質問1～21)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う

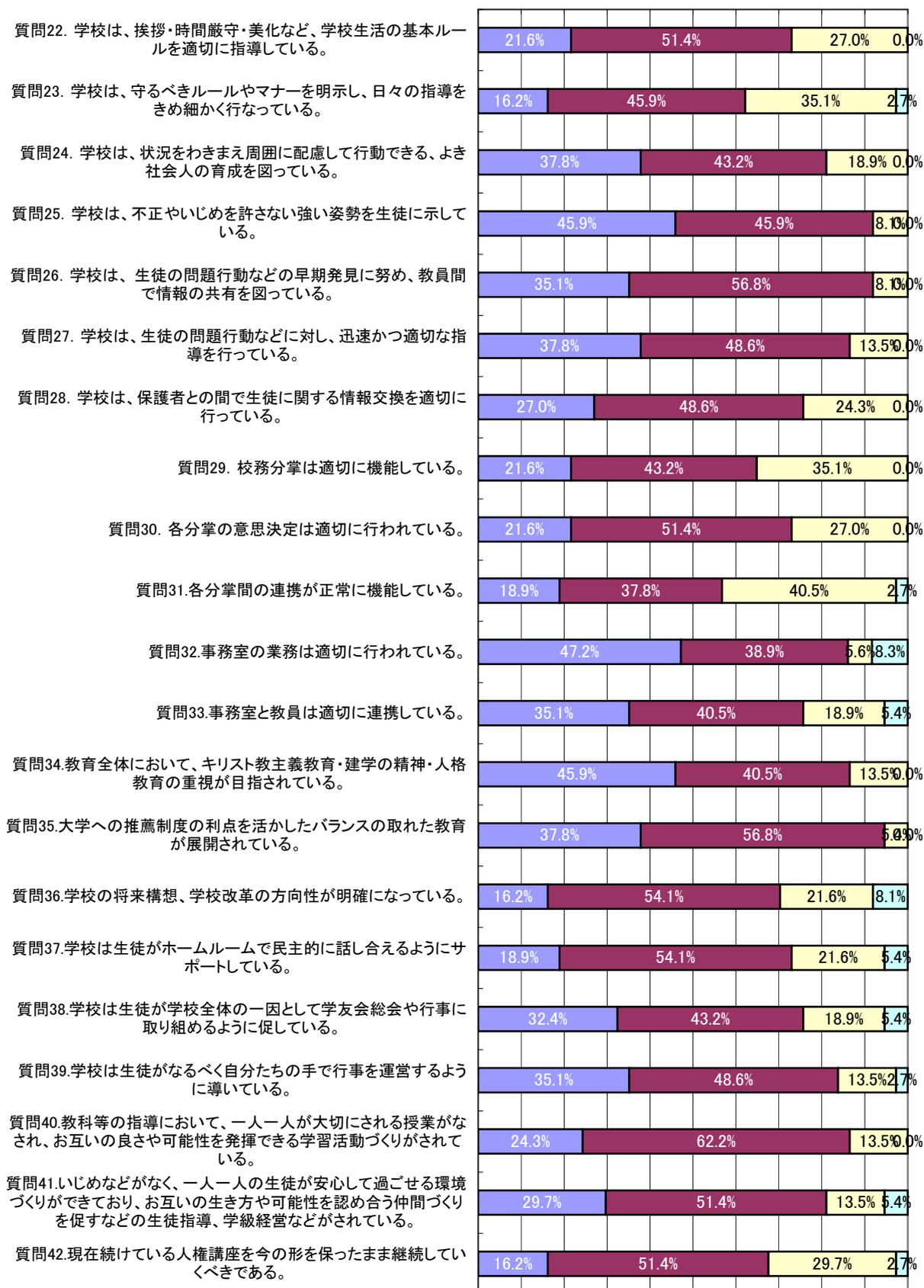
■ 回答番号2: どちらかといえばそう思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(高等部・教員 質問22～42)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



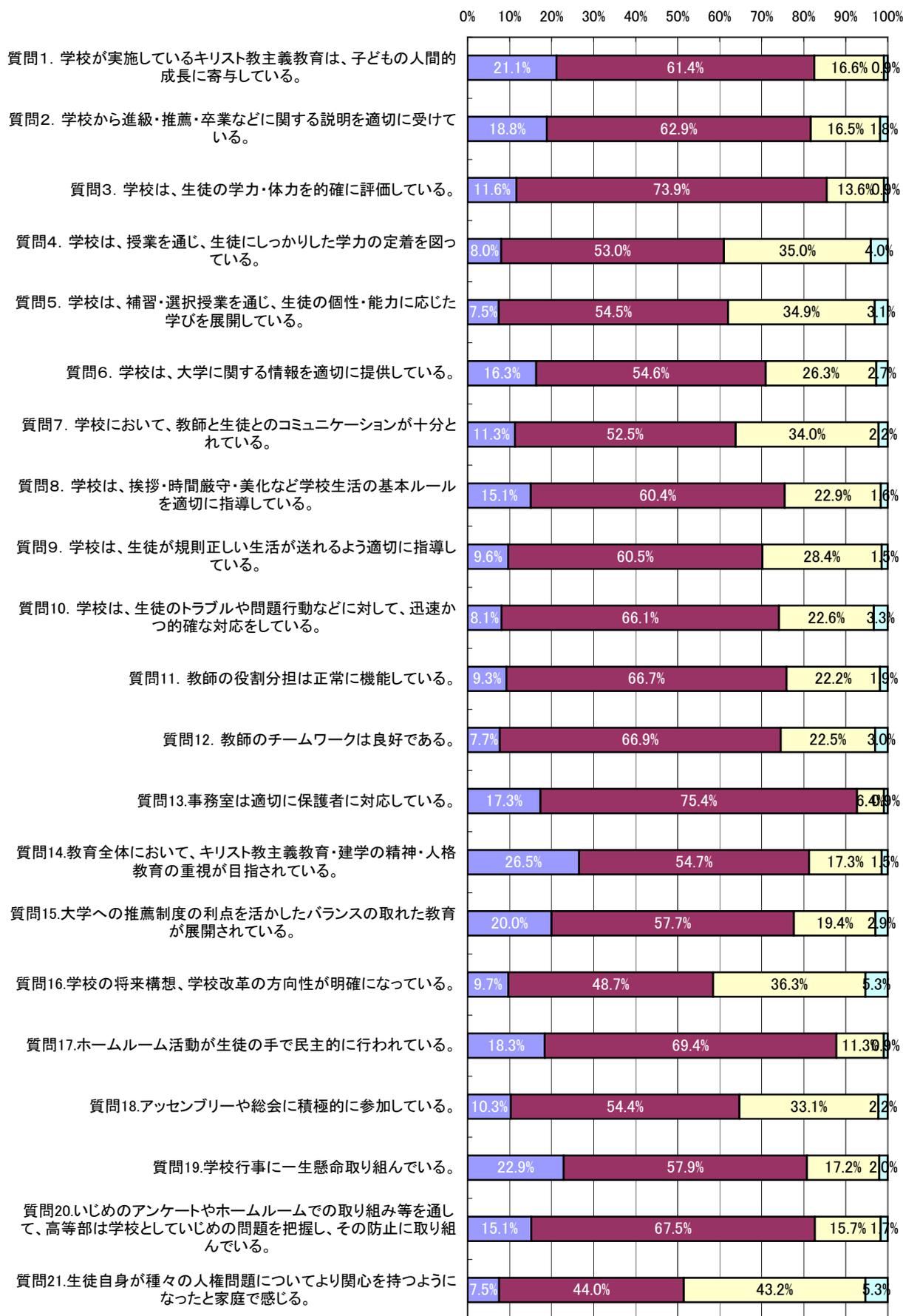
■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(高等部・保護者)



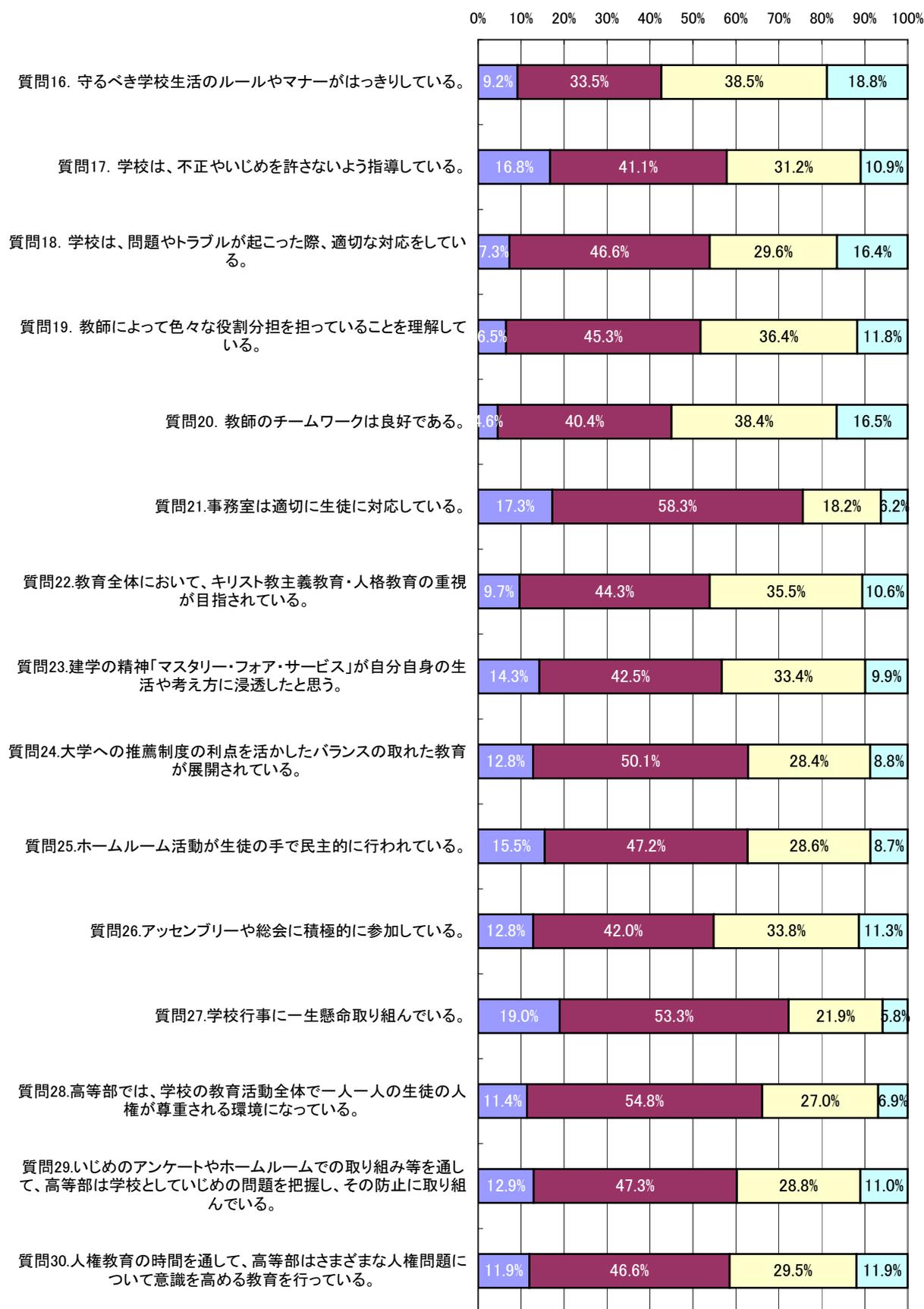
■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2011年度 学校評価アンケート集計結果
(高等部・生徒 質問16～30)



■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない